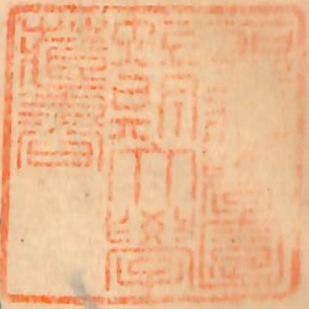


912.3

三

朝通清
長盛經
安春藤
宅榮榮
久



わき詞

賴政 脇僧人 角帽子系方し
糸衣腰帯珠敷袴

是は幸國方より來りて海僧とてい我は

猶海陽の寺社より來りて海僧とてい我は

く見侍りては又是より南郡小寺

より來りては又是より南郡小寺

より來りては又是より南郡小寺

より來りては又是より南郡小寺

い^れやち^れ揚^り取^り久^く大^だ勅^し学院^{がくえん}の^の産^う家^け
求^{もと}も^もは^はつ^つと^とり^りも^もあ^あの^の人^{ひと}を^をゆ^ゆま^ま
せ^せら^らあ^あう^うう^うう^うあ^あの^のあ^あ揚^{やう}は^は仰^{やう}す^す
み^み一^い番^{ばん}は^はく^くの^のあ^あう^うく^くは^はそ^そは^はま^ま
け^けう^うあ^あ事^じの^のと^とを^をわ^わう^うの^のあ^あま^まあ^あ揚^{やう}は^は
仰^{やう}あ^あ我^{われ}唐^{たう}八^{はち}都^との^のあ^あう^うと^とあ^あす^すむ^む
世^よを^をう^うら^らい^いま^ま人^{ひと}い^いふ^ふあ^あう^う人^{ひと}い^いふ^ふあ^あう^うと^と

わ^わあ^あま^まう^う揚^{やう}の^の揚^{やう}は^は又^{また}あ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^は
也^やい^いは^はあ^あう^うる^るあ^あ揚^{やう}は^はあ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^は
あ^あ揚^{やう}は^はあ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^はあ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^は
の^の揚^{やう}は^はあ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^はあ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^は
揚^{やう}人^{ひと}あ^あま^まあ^あ揚^{やう}は^はあ^あ揚^{やう}の^の揚^{やう}は^は

自害一すてあひてはされいふもの古

今ふまきの

知のあふー あま い そ て あ の も お し を

ゆー あ ま た あ の た へ を え

かう あ ん せ の れ り あ の も わ ら う わ

人 あ ま を あ 軍 れ り も う あ ら

て あ ま の あ 軍 の り も う あ ら

あ ま の あ 軍 の り も う あ ら

用果乃西之海ありて世に押法
乃西乃西之海ありて世に押法
名も金乃西のうら雲ぬの原
玉の月乃都を思ひあてし
とに金乃西や 舟ちりて海
老も福お平あへてくらき枝万枝
のほりのと世の東にほりて

も科の山つる山科北里ちりて
雲をよほふとてくらき世乃
字活れけお波るたぬ海に
まちとらとれるとて雲の
あくまの雲とてくらき馬
ちをよほふとてくらきの
あありとて平木院に

平泉家のほとの宇治川の南水のう
ふらねる時のおうきさひのうも
うへへひきく　ふらねる南水の
清く一葉は神　ふらねる味方ふらねる
海をう　宇治橋の中へる　ふらねる
下は川浪ふらねる　ふらねる　ふらねる
ひきく　ふらねる　ふらねる　ふらねる

平泉家のほとの宇治川の南水のう
ふらねる時のおうきさひのうも
うへへひきく　ふらねる南水の
清く一葉は神　ふらねる味方ふらねる
海をう　宇治橋の中へる　ふらねる
下は川浪ふらねる　ふらねる　ふらねる
ひきく　ふらねる　ふらねる　ふらねる

柳 花 飛 盡 綠 陰 深
暮 春 風 暖 燕 雙 飛
花 落 紅 香 滿 地 殘
香 在 枝 頭 猶 似 春
風 輕 暖 燕 雙 飛
花 落 紅 香 滿 地 殘
香 在 枝 頭 猶 似 春
風 輕 暖 燕 雙 飛
花 落 紅 香 滿 地 殘
香 在 枝 頭 猶 似 春
風 輕 暖 燕 雙 飛

柳 花 飛 盡 綠 陰 深
暮 春 風 暖 燕 雙 飛
花 落 紅 香 滿 地 殘
香 在 枝 頭 猶 似 春
風 輕 暖 燕 雙 飛
花 落 紅 香 滿 地 殘
香 在 枝 頭 猶 似 春
風 輕 暖 燕 雙 飛
花 落 紅 香 滿 地 殘
香 在 枝 頭 猶 似 春
風 輕 暖 燕 雙 飛

なまひの雪乃びきなる松うれハ源氏
乃旗をなひく多勢も肝をきん
夏小清経るふお蔭てふふやう去て
巨八懐念山院室あつたふらんふ砂
海より磯面出乃うふすやどりおか
とだふおおひさるふ美からきあや
とそと清へき露の男を 程なきかお

深乃浪ふさそまれ毎ふ海ひく
すてう海あを水鳥れ沈る果んと思ひ
きるふ今はいそて思代乃あおあり
や曉乃月あうおひくもきそてあ
魚乃こはあある腰うるやうふぬき
叶ふもとそやふおかなくふやう
をほひ朋侶しあふかこり来をわ

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Urdu, with red ink used for decorative elements and corrections. The text is arranged in several lines, with some words written in a larger, more ornate style. The page is numbered '۱۰' in the top right corner.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Urdu, with red ink used for decorative elements and corrections. The text is arranged in several lines, with some words written in a larger, more ornate style. The page is numbered '۱۱' in the top right corner.

のしとておまのしとてまふさふさ秋
乃あき地系秋乃焼系乃焼まてと
水部れ夕焼一序れ雲とあり清く
多と形もあき秋そまふさふさ
しとくおまれ雲の乃武あふさふさ
ひつふふと時の玉換やふさふさ
なまふさふさ八日の雲ふさふさあき門

を敵まの誰なりとてまふさふさ徳田屋と
作られ秋ふさふさひつふふさふさ
なまふさふさ人由の秋まの秋子徳田金
丸と秋ふさふさふさふさふさふさ
一果を秋ふさふさふさふさふさふさ
秋ふさふさふさふさふさふさふさ
る乃内海へふさふさふさふさふさふさ

如古廟とやらんて睡をくらふ村に
く如を語りて来文金のまゝに
の如をみて南無阿彌陀佛と云ふ
三つもて徳田友より如長乃阿彌陀
て如もきれはまゝ義の如き阿彌陀
ふもや阿彌陀衣も如にせよ目も如に
を撰ならし徳田友拍へやされ義の如

自害す家なを伴はせられ如き息の下
あゝさん如古廟とて睡をくらふ村に
既難哉ふひは家なをふかきも
ありて今今いふもひの如き阿彌陀
光の如きも多かり大死をてく
自害なり如唯此阿彌陀金をも
えり如ふ成りてさうゆひの如き

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

まゝぬ世乃夢いある唯何事と打
きて以法をどう務め入居くおれ史観
小紅花をて世海小橋を以て大業小面
骨とありて郊外小橋ぬおれ骨ハ平
たふめて物家まを後一なり上由
代を治め國家を志めく可哉乃政を
あやめく一に保元平治の世乃乱也

かな海時うまをん 六等なり
乃乃誇さ 偏小時節 身事あり去
後小婦子無源を義平ハるちに義平
一と多勝小を勝叶を称力なく生捕
ある終小休せしきおるおれ男を来休せ
ハ平多来うもて渡一を也郊へを
也乃海に義平ハるを也也也也也也
也乃海に義平ハるを也也也也也也

あひ定て版文字ふききつてを
に供^二所^一ふ^二しら^一地^二の^一七^二と^一あり^二家^一
あき^二流^一を^二う^一ひ^二く^一ふ^二ひ^一流^二人^一

阿濃

脇僧人

角帽子 水衣 腰笏

ふ^二流^一く^二此^一秋風^二く^一本^二乃^一ま^二月^一そ

ま^二く^一な^二死^一 是^二を^一西^二玉^一方^二り^一る^二お^一海^二僧^一

あ^二く^一の^二我^一の^二ま^一こ^二を^一作^二あ^一ふ^二あ^一痛^二り^一ま^二れ^一

作^二福^一ふ^二び^一ふ^二ひ^一ふ^二ひ^一ま^二ふ^一の^二ま^一あ^二出^一ま^二る^一

今^二の^一流^二流^一の^二お^一き^二や^一く^二難^一波^二の^一浦^二お^一

あ^二く^一の^二ま^一あ^二り^一那^二れ^一月^二彩^一色^二雲^一井^二の^一

とくしうるしにすひるはまに
まほたまと持あてくあをもかへすべ
浦の沖に洗めり さあふいせ
おのほれ形ふさに力さるし海
面ぞくおらふ神神冠と侍るや冥途
のたまたもは波あてふふし
とくは流るるやがさくのせめ

あて若しうもたひ重なる罪と
くせ強やわいめへを侍るも
あふるもふほたまうたふ力
のせううれはるし錦木をね
らりふ東のたふもあふ月のほたま
たふらふり則清と濁えりそ奇
人の悲ひつまあふくといふ人

せめつらき人にまひまなほをあらは
おもひて後屋敷の遊具の幻をみる
て物乃の浦浪れあなりを清値遇
那つ樹の原をさてもあけぬ家
く物さみも先の世乃値遇をあら
ね法ふうくもさるる家 目もさる
の漁りうりまきもあやまらぬを

新とかのふろとゆ 海上
海村芳ふはまもさるる 細の
はなまきもさるる 中
あしきもさるる 俄る果もあつて 海つて 固く
ききもさるる ちん浪もさるる ひさるる
る 清くさくさるる いふとさるる
の波ふさるる 一とらあて 松るる

たひきあはれは浦の飛脚をな
 をかへんいんふたはとちかへやまひ人
 らく又は入るものゝ又はさうふ
 りあきり

女席也 脇僧入

角帽子水衣
 腰帶珠紋扇

わさ

是る九羽松浦のさうまあはれ僧あふ

我のうさむとふさむは程ふけ秋ひる

へよりあき住なまき一松浦れ里をき

くあきぬひの筑はるうさ津う程ふ

きさう海猪れたうきなまきく

きし程ふさふや津西山崎とや申山

粟のあも〜信守にて女帝ととて厭
ふをさひくたふ借光をたふさつら
ゆて左を男山名をたてさき海女
あれおろし海女ふらふてなと情あ
ふらふまふあふらふかの猿人屋敷
をいふ海人あふゆすせは是程あ
あれまふ海女帝をいふとゆふそ

信守とて理らふよは野道にあら
はまふひ海女あふとゆすせは
あまの男あまふとゆとてふ
あまふとてふとてふとてふとて
あまふとてふとてふとてふとて
折つてたふふとてふとてふとて

此佛おぢも海をくぐりて海を渡る

いふふう様も悟りて海を渡る

た極おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

おぢも海をくぐりて海を渡る

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Chinese or Japanese calligraphy. The text is arranged in approximately seven horizontal lines. Red ink is used for punctuation marks, including dots and small strokes, interspersed throughout the black ink characters.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Chinese or Japanese calligraphy. The text is arranged in approximately seven horizontal lines. Red ink is used for punctuation marks, including dots and small strokes, interspersed throughout the black ink characters.

これら
まゝに
ゆゑに
これ

一 おまゝなる法ありて候文に云ふ人
あんぢうの難き身地にて候は
や目の書ての移ふ日村のいふ海作
世は男山と半と女帝あまの海
謂ふては、あう何ともなやまよふ
帝地の古新をひいて候れをよみては流
事あくは男とともなるあまの海

み付る謂ふては、又は陰の男海
はあまの海に候ては、いふ人
あまの海に候ては、いふ人
と云ふなるは、女海に候ては、男海に候ては
女帝の謂ふては、女帝の海に候ては
あまの海に候ては、いふ人
名字をいふ人、いふ人、いふ人

おしりく おしり ありはるふきなりや おしり

葛屋の室にきては おしり 日の暮れは おしり

乞女 おしり 葛屋に若きなりや おしり ねいふは おしり

葛屋の肉 おしり 葛屋 おしり ねいふは おしり

行 おしり 業 おしり 葛屋の若きなり おしり 一 おしり ねいふは おしり

う おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

叶 おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

おしり 日の暮れは おしり

おしり おしり 一 おしり ねいふは おしり

あ おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

の おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

あ おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

あ おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

く おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

何 おしり へ おしり ねいふは おしり ねいふは おしり

其人といふはすい足はうかき也。男
月をぬきまて海へいそて せういそ

きあまの屋のうきとて

わさく せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

ははつ 名字をいそて せういそ せういそ せういそ

友たき門及うきとて海へいそて せういそ

何とてわさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

わさく せういそ せういそ せういそ せういそ

男△
 さらんせよ
 ときなり
 早
 んなよ

よはれ
 ふうふう

更におさうんやうくは わき 山を渡りて
 四時 よはれ 舟の目 く であらふ
 ぬ夜舟の 男 たらへ何くもていそあ
 ち成をいそく わき へおきひのより
 なる浦 わき おあつて わき 西へ
 浦 わき おあつて わき 西へ
 まさ わき 向ふく わき 舟より わき 密河ふ

男△

むいてい

い
 ふうふう

さるあてい 男 へ わき 又 わき 舟 わき へ
 り わき へ わき へ わき へ わき へ わき へ
 口 わき へ わき へ わき へ わき へ わき へ
 舟 わき へ わき へ わき へ わき へ わき へ
 あ わき へ わき へ わき へ わき へ わき へ
 い わき へ わき へ わき へ わき へ わき へ

はるるて海にすする中なる

あふとまじし直出大馬力
扇供入らんをさくは松指

河原のく^ま柳^まお^まま^まに^まり

そ^まれ^まち^まお^まま^まて^まく^まつ^まふ^まと^まと^ま

れ^まれ^まと^ま我^まも^まと^ま枕^まさ^まら^まぬ^まる^ま

わ^まる^まと^まま^まの^ま山^ま松^まの^ま中^まに^まて^ま山^まの^ま

お^まま^まら^まて^ま山^まも^まま^まて^まの^ま山^ま松^まま^まら^まて^ま山^ま

お^まま^まら^まて^ま山^まも^まま^まて^まの^ま山^ま松^まま^まら^まて^ま山^ま

と

右^ま野^ま新^ま田^ま乃^まお^ま葉^まさ^まら^まれ^ま越^ま後^まの^ま

月^ま書^ま史^ま船^まの^まお^まら^まま^まら^まぬ^まあ^まお^ま水^ま上^ま

黄^ま帝^ま此^ま山^まの^まお^まら^まま^まら^まぬ^まあ^まお^ま水^ま上^ま

お^まら^まま^まら^まぬ^まあ^まお^ま水^ま上^ま

お^まら^まま^まら^まぬ^まあ^まお^ま水^ま上^ま

お^まら^まま^まら^まぬ^まあ^まお^ま水^ま上^ま

お^まら^まま^まら^まぬ^まあ^まお^ま水^ま上^ま

酒時貨物海上の池の面てをんばせられ
 花枝乃事ぬふまに風ふあ柳の二葉
 ありふゆみしあ枝とふ出さるる屋
 お落きる其つ葉の上ふはるる花
 おきふのあさるあも柳の葉を吹く
 風中をそまにけあさるる花
 花のあさるまひ花もあさる花

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

卷之六

卷

卷

馬とあはる

卷之四

七

進んで

○
h

ハツラヒと云ふ人

四

カ

۵۰

88

一

くう一海もの世にあらく 屋あそくも徳

金れあめも實信よんをきくものあふ
何ぞ八ちらむといぬそくてもあそめり
田ぬいふれ振舞かなお月あを六追
財を世中の屋川となすも事代
あふれ振舞や我がやうの張とぬて徳
あそめり事代金よの儀おれをさす事

あふあふ世にあそくも人なる事を
なせんかあありふふ月あそめり
金あふらんがふをよき田あそめり
の金七百金町のあふものよきあそめり
しよあふらんがふをよき事なるもの
流石あそめり流石あそめり
あふらんがふをよき事なるもの

春榮ぬハエナ
のうさうとつら
まねを依侍人又

勢

今亦難之

一ツカレ

四
五
六

人

のゆらなるとしてゐるは、（五文）林と制、（五文）成

人

累

夢

少刀扇

三太刀持

トスワウ

一

友

ぬきやありく。花や風のみふ

元武藏國乃伯人増尾の書

種。少。以。拇。色。以。夜。字。注。樓。子。合。第。

小石にて葉のうしろに

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and discoloration, characteristic of old paper. The binding edge on the left is visible, showing the stitching or glue of the book's spine.

萬葉集卷之十一
上卷

水才^{オト}より山喜樂^{オト}入^{オト}一^{オト}登^{オト}之^{オト}く^{オト}と^{オト}生^{オト}

捕まて以承へむ生捕の人数を三様

うき世の中を来りてうき人

救ふもやと云ひ唯今ま業うゑあへ
 存上

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

刻之

Handwritten musical notation on a single staff, featuring various notes, rests, and accidentals. The notation is written in black ink on aged paper. There are several red markings, including a red 'x' at the top right, a red 'x' in the middle, and a red 'x' at the bottom left. The notation is written in a cursive, handwritten style.

Handwritten red text, possibly a signature or a note, located below the main staff of notation.

Handwritten musical notation on a single staff, featuring various notes, rests, and accidentals. The notation is written in black ink on aged paper. There are several red markings, including a red 'x' at the top right, a red 'x' in the middle, and a red 'x' at the bottom left. The notation is written in a cursive, handwritten style.

Handwritten red text, possibly a signature or a note, located to the left of the main staff of notation.

泰のわが師通さうは 上れ塔尾
のき業ハ 現世の兄を上人と云ふは
そ逆飛さるゝあふ 殊と云ふなり也
わが巷に角小命を捨るまで 種重安
あて腹切ん屋刀をさす河はちう
に刃を添へ あふく 昔はあふ
金と助をさるゝ人ぞとて 下人ともす
事

わが忠小成るるゆゑに 兄はあふ
種重もき業もく せうもあふ
共を承れんをさひ 厚り 実持をい先
成るゝ友小彼をわく 言
事

種道改出先承れん中をさるゝや 我電
落後仕ていふ 種重も 言
はき業殿の山中 別る痛のや 事

うとちやちうーやせとのしずめてい

痛しあかりある事、其榮及ハハ

後の世に名はく種世公急見より古久

讀書

尔言梯及乎以河

丹以

此の事ハ心をもあまら

此中みても強ふき菜をハ助を某と

ちうては

見作長山久喜木

か母の旁より泣くゝるちり佛の親世も
種重なり見ふは人の心と成るや久し
是なるのみ、善業の家の文にてなり又
形見ふは母玉の我妻友のすそを切さる
時著一筋をふあふとあてはせ給ひし娘を
業の形見ふあふするあふ雲あや見え
色我をも世に成る事知るあふはあて

其上人の子をいふにそは、
上れ心の内おひ辱もて痛しや
宝やいさ年せ居る何事とあめを悲
ゆき居るあふ一世人のあふは世に
と父母れ教ふなり、
又育れらんあふもあては死し死てあ
生に流物あふる事生れ親子あて

唯又日此の人 佛の心くみ
車も繁出の境をきくやんふ
この三の程はあまのふり
よきま生れおのれもく人
るまのうらまなまの去来
理もおもはんよまのやう
たふし車輪のあまの我ん
たふし車輪のあまの我ん

是又我を害とせし生果若し
沈んで法の舟を渡すを
此のきけりて四の法を
又と佛法ありて人の法
ありておのれをたふす
またあまの心くみ
来迎の衆念佛ありて

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a form of shorthand. The text is written in black ink on aged paper. There are several red markings, possibly indicating specific notes or corrections. The script is dense and flowing, with many loops and flourishes.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in black ink on aged paper. There are several red markings, possibly indicating specific notes or corrections. The script is dense and flowing, with many loops and flourishes.

あつるき代のちか。まふあふなり。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。
まてあつる万葉の。一。おんけいのまふ。

あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。
あつる万葉の。一。おんけいのまふ。

あつる万葉の。一。おんけいのまふ。

三十一 竹の 親子のちきり 又いんか
三十二 孝行をもちあふる徳のふれり
三十三 孝行をもちあふる徳のふれり
三十四 孝行をもちあふる徳のふれり
三十五 孝行をもちあふる徳のふれり
三十六 孝行をもちあふる徳のふれり
三十七 孝行をもちあふる徳のふれり
三十八 孝行をもちあふる徳のふれり
三十九 孝行をもちあふる徳のふれり
四十 孝行をもちあふる徳のふれり

本宅

脇十と千原板直垂大
脇節少力扇太刀持八柱言師

三十一 孝行をもちあふる徳のふれり
三十二 孝行をもちあふる徳のふれり
三十三 孝行をもちあふる徳のふれり
三十四 孝行をもちあふる徳のふれり
三十五 孝行をもちあふる徳のふれり
三十六 孝行をもちあふる徳のふれり
三十七 孝行をもちあふる徳のふれり
三十八 孝行をもちあふる徳のふれり
三十九 孝行をもちあふる徳のふれり
四十 孝行をもちあふる徳のふれり

志のめをやくゆりの浅茅を付河ら
 山をいの海を居久しき非きや松の
 本れめををりきふ君てす海松山

人乃るはる。河津のあけあきふゆと東
三國の漆成衆の志れり。浪もせくまひ
い嵐もさききき花の安宅に急
ちりく。山意の移ふあさかの漆小舟
あてぬ。さうくわらひ人いふ。
此水流体あまさるあさかの心
ふみま。山意水作。唯今語人。

乃て此の書を國にあり
 とも取らるる
 其書の漆の形を
 乃て此の書を國にあり
 とも取らるる
 其書の漆の形を

皆々半乃西り。殊き乃中何ふ
 す。尚きく。^{（建山）}
 我あま中^{のちんハ}。何れとの
 とれいさ。すく打破て西よりあまう
 とぬ。七。惣^四作のともけ。雲一布打破
 て西より何ふす。海い。あま事。あくと
 口^{（口）}をな。亭より。雲よ。てはら
 口^{（口）}所。乃あま。西事。あくと。口^{（口）}。す。何
 事。も。あ。乃儀。然。今。う。ぬ。利。入。也。も

書

● 悪くしう
又なれず
笑ひて
事なり

[illegible]

△ 佐と上代の
お通と
おはる

[illegible]

あむのあむんおまゝれき泰や
ていさう眼おあひで海玉をつぬ
おまゝ人海おひるへて盧遮那佛
速きとてやものまのあうたす
とをわけておまゝ人せう坊胡を
を効をよとてあむ銭のや并れ
はせめくはきさのらにやうら
い

あてはきせん蓮花のよおまゝ人海命
強きとてやものまのあうたす
ていさう眼おあひで海玉をつぬ
おまゝ人海おひるへて盧遮那佛
速きとてやものまのあうたす
とをわけておまゝ人せう坊胡を
を効をよとてあむ銭のや并れ
はせめくはきさのらにやうら
い

いふ様もうちて三下すもいふさうかゆそ

ておの膳方、あゝぬそぬれといそ何連

は方よりあてい、まゝ何さてはぬいそ

おの膳方、ちと人お似ては程おあて作

何とく人お似するもあつゝかぬ作

見はぬ作ふ似て作そ判友度お似

るもともおのし程お落居のるぬいし何

お膳方判友度お似るとお中く仕事

言語乃判友度お似る合方めハ一物の

おひお腹を空目さくは膳を乃くおさぬい

さうするもあひおさうしあひあてたお

さうさうくもあやむさげ程さく

くと思ひつるおさく地をせて金えんて金

剛杖をおひちてぬに打擲す通きとこ

そお波お目をおおさくは海人さうぬか

口キ
△休とちし
さうさう通
らな
して
さう口を
そめ金一

下
りてをあらせしはえら成る様那
然る義経馬れあふ事さうく令
をねむふなりかんを海の流れふあ
め山野海を流す時をものぬの
道の神枕かたを流す彼のとき時ふふ
うひ風波は身をねむる時を人せきの
る時をねむるの中ふ海をあらある夕

波のまを流す時を人せきの
とあふ流をせしはえら成る様那
つふ成るは身をねむる時を人せきの
判上
とあふ流をせしはえら成る様那
のあふ流をせしはえら成る様那
おろてはうあふ東南れをあらある夕

をり浪のうづるへき旅のしるしを
まゝまゝのちやうどなほあつたの
はしをゆゑも別てつくしめを
もまゝのちやうどなほあつたの
水田のちやうどなほあつたの
のちやうどなほあつたの
東をまゝのちやうどなほあつたの

聖
れ中ふいそがよ替り割れ乃大井は
るのちやうどなほあつたの
れ中ふいそがよ替り割れ乃大井は
るのちやうどなほあつたの
れ中ふいそがよ替り割れ乃大井は
るのちやうどなほあつたの

なり雲の端より舞えり山梨のめりや
月よもや強金にまきりく
乃あつちんあいをなす月実やそをも
あつちんあいをなす月実やそをも
國あふけきぬ百寿の業む八雲中の夏
一寸乃光陰は沙塵の金雲をなす雲井の
よそも世もとほりーな人をむる世な

此や秋枝のぬるるの雲霞雲の海
此あふひかりがてなめり人ふ面をさ
まんらあつちんあいをなす月実や

わ
あつちんあいをなす月実や
作は月よもや強金にまきりく

あつちんあいをなす月実や
あつちんあいをなす月実や

あつちんあいをなす月実や
あつちんあいをなす月実や

此の世にありやをあらわすつて金
ねふいふを誦するにあはれは法を思
地獄界を出生せしむる死を思ふ今
は又の世をくわくを思ふくのを思ふ
及ばるる一を思ふと夕露の命を
しるすを思ふ後生を思ふつて
男山のまねは花一餅と西の方あり又

上
下
世の利益同くく刑罰小ちりき見れ
折ひおそるる人あや威く終りたも
うわらねやあやうやあやうや

下
眠乃らふあつたお妻をさううかりて
何うも難やい既今乃多啼ては元は
の時を今なりとやくいふはなほ

名之何者

上
 うゝの^こは^へは^ふ^に程^さ淺^くの^う海^の又^も新^し
 物^{もの}多^{おほ}き^に念^{ねん}彼^か親^{しん}善^{ぜん}む^をか^が尋^{じん}恒^{こう}懷^{わい}の^の
 經^{きやう}文^{ぶん}あ^らた^けふ^りあ^きは^るま^じ修^{しゆ}に^お覺^{かく}
 に^{より}來^{きた}世^よあ^らく^はな^{かり}なり^ある^ま難^{なん}れ^ば
 経^{きやう}や^めと^いひ^ゆ穿^{せん}り^め志^し此^こ前^{ぜん}小^{せう}乘^{じやう}建^{けん}と
 の^の四^しつ^つみ^み智^ちに^かさ^るま^じ是^ぜハ^ハ大^{だい}知^ち小^{せう}あ^らう^ひ

感之德余有示来りりく
一七五七
五七五七

歳久の事。今威之我。と。少

き乃西果夏の告あり。成る久おまひて
いりあるへい。
夏金丸の心平光てい。はと何をお

今人云。と東郷もさういふ人多う

ありてのきくをきく後の聲うと云ふ

史不取心元計

おろしひかり人唯もなるを
我を念する時其のまゝ人の罪は
海へいそんを世年月世念のま
ぬきんとおろし人ふえすりやま
あまう我海に命にうへこれひ
美を別さめふり感ふるうひ
親友のあまう海へいそれをま
上

いけ曉き正後起し同告を
わなめる人かんを海へいそ
よりふを海へいそ
を海へいそ
久きりて海へいそ
せんかきおた感ふる命ふた
美をいそふそと海へいそ
上

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document. The text is written on aged, yellowed paper. Several words or phrases are highlighted with red ink, including "Sanskrit" and "Sanskrit".

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document. The text is written on aged, yellowed paper. Several words or phrases are highlighted with red ink, including "Sanskrit" and "Sanskrit".

